

行い、研究のまとめをしていくこととした。

4. 研究の結果

本研究は、まことに遺憾ながら、2年目の2005年度、日常の授業や諸々の活動に没頭し、両自治体に出向いてのフィールドワークに時間を割くことができず、全くの足踏みをしてしまった。したがってせっかくの研究助成にも手を触れることもできなかった。

人口2000の泰阜村は平成の大合併の嵐が吹き荒れる中、合併を拒否し泰阜村として存続し続ける決意をした。村民の“畳の上で死にたい”という願いを追求し続けることにしたのだ。介護保険の利用者負担においても村がその6割を肩代わりすることと限度額を超えた額の村負担を維持し続ける。そのための支出増は年額1700万円という。一方、大津市は1974年の「大津方式」発祥となった“保育元年”から、重度の障害児を含め全ての希望する子どもを保育所や幼稚園で受け入れる施策と実践は厳しさを増す状況の中でなんとか保っ

ている。そこには、大津市人口17万の市民一人当たり1万円にあたる負担があって可能となっている事実がある。それを可能としているものは何か！

国の施策とは別に自治体の単独事業を可能としているのはまぎれもない住民のコンセンサスである。そのコンセンサスは何によってもたらされるのかは2年間の研究期間をこえて2006年以降に持ち越されてしまった。

2006年以降、この二つの自治体に加え、富山型共生ケアとして近年注目を集めている活動、そして秋田県鷹巣町（現北秋田市）でのケアタウン構想とそれを支えた住民のワーキンググループ活動、そして行政と住民の関わりを総合してコミュニティワーク的視点から住民を主体者とする福祉づくりとはいったいどうあるのかを複数年かけた研究として挑戦していくことを約束し、今回の不本意に終わった2年間の報告としてお許しをいただきたい。

社会とヒューマニズム 子育て支援と次世代育成における異世代交流の 相互発達の意義と効果に関する研究

子ども学科 金田利子

目的：2年目の研究である。昨年度は、大学の中に「世代間交流広場を」立ち上げその経験から得られた効果についてまとめた。（『研究年報 No.10 PP.4-23』参照）

今年度は、さらに実地訪問、および新たな仕掛けを取り入れた世代間交流広場の継続、また、実態調査の実施や「子育て広場」の世代間広場の反省会等を通して、発達と発達の相互性の本質をさらに探ってみることを目的とした。

方法：具体的には、以下の様な順に実践的研究活動を行った。①他の先進的な取り組みを実地に

訪問したこと、②広場の中に世代間の発達の交差が出来る様な企画を取り入れたこと、③世代間交流の現状把握のため、小平市内のそれぞれの世代の交流の実態と相互イメージについての意識の調査を行ったこと。④これまでの世代間交流広場の成果は何だったのか、実際には、高齢者と学生の2世代ではあったが、互いの立場から十分に話し合う機会を設けたこと、そしてそれらを通して発達と発達の関連と相互性について考察することとした。

結果：上記の方法順に述べる。

①他の先進的な取り組みの実地訪問調査

これまで、の先進実践を文献・世代間交流協会研究例会などからの情報により整理する。大きく分けると、A-a) 共同生活をとおして「施設を大家族化・地域化していく取り組み」とB)「地域における世代間交流の拠点づくり」という両方向があることが見えてきた。その他、A-b) A の発展として、認知症の方の残存能力を子どもの学習指導等に活かし、双方が共に恵まれ合うという取り組みがある。

当年度はA-b) にあたるウェルネスグループ(桑名市)を訪問し、交流・観察・聞き取りをおこなった。ここでは、認知症の方が学童保育の子どもたちと、勉強を通して交流出来る様子も確認できた。

②今回の「広場」には伝統的な遊びを用意するだけでなく、多世代の特徴と関わりの姿が見えるような工夫をおこなった。

i) 一つが、多世代と一緒に描いて何らかの作品になっていくような巨大お絵かき・書コーナーをつくり、筆による「書」の道具も用意したことである。

その結果、世代間交流作品が出来、広場の最後に披露した。そして高齢者の書の達人が、大きく「世代間交流広場」と題名を書いてくださったが、その間、学生も小さな子もその親たちも書けていく「筆字」の様子を固唾をのんで見守っていた。

そこから育ったものを明確にアセスメントするまでには至らなかったが、誰もが自分らしく表現し、書の達人の場合には、表現の喜びと同時に「省察労働」において役に立つ喜びを得、見る人たちも書芸を堪能することができ、それぞれの描いた絵には、それらの題名として位置づいたことにも満足感があった。

ここからは、どんな交流が世代間のつながりを深められるかの示唆を得ることが出来た。

ii) もう一つが「三つの願い」の木を用意

したことである。

10代から80代以上まで10年毎に色分けしたポストイットに自身の本心からの願いを三つ書いて、木につるしてもらった。この手法では願いと願いが響き合うという所までは行かないが、世代によって明確な願いの違いが出てきており、その多世代が関わられる、あるいは学び合える活動を考える有効な手がかりをつかむことができた。

③世代間交流及びシニアイメージの実態調査の実施

上記の様な取り組みの必要性を明確にするために、世代間交流広場を実践している、本学の所在地である小平市をターゲットに10代から80代以上各年齢ステージ毎に50人以上にアンケートを配布した。世代間といっても、まず学生とシニア(65歳以上)が交流し、他世代に広げる手法で「世代間交流広場を大学で行ってきたため、シニアと関わった経験の有無や、3世代同居などの実態と、交流していない人にはその理由を聞き、今後どういった交流ならしたいと思うかなどについて問うた。

その結果、ここ1年の間でシニアと交流したことがある65歳以下の世代を平均すると61%が経験有りとしているが、していない人の割合がしている人より多い世代は、中・高・大学生の生徒・学生世代であった。また、子ども世代の同居率は20%以下であることが分かった。

ここ1年間に65歳以下のより若い世代とかわったことのあるシニアは85%と多いが、全く関わったことのないシニアが16%もいるということもまた事実であることが分かった。また、小学生のなかにはシニアをかわいそうだなと思っている人が多いことなどシニアに対する偏見や、近所で少人数で飲食物のある場でなど、身近で気軽な交流ならしてみたいと思っている人が多いなどの実態にも迫ることができた。

④学生と広場に関わってきたシニアとの話し合い
— それぞれに取り組んできた

「世代間交流広場」に関する自己評価 —
世代間といっても全ての異世代とのかかわりからはいると、複雑すぎて関係が見えにくくなるので、ここでは、まず学生と高齢者のグループが対等に関わるところから子育てにおける世代間交流の意義を考え合ってみる方がよいのではないかと、学生が小平高齢クラブの方々と相談しながら世代間交流広場をすすめてきたので、両者で何が成果であったかを話し合う場を設けた。

内容としてはアンケートの結果を基に、双方の感想を出し合い、世代によってどこが一致しどこがことなるかを中心に話しあった。詳しくは、この取り組みを論文の形でまとめることになっている報文にゆずるが、2年前にはじめて相談の会を持った時と比較して、双方とも、様々な交流する中から、二つの世代がうち解け合い、本音で話し合うことができたと言える。

そこには言葉一つでも受け止め方が異なり誤解が生じることもあったが、そうしたことも許し合いながら、それぞれの何を求めて、日々どんなことに配慮して生きているかを理解し合う関係になってきていることが分かった。そうした異なる点が有効に活かされるとき子育てについても家庭や地域において

間接的な相談関係ができていくのではないかという手がかりを得ることができた。

考察：交流から「協働」へ
— 相互発達の効果のために —

「子育て支援と次世代育成における異世代交流の相互発達の意義と効果に関する研究」というテーマに即して、17年度に行った諸リサーチ活動から得られたことについて簡単にまとめる。

「世代間交流」というが、交流にも質があり、単に異世代がある場面に一緒にいるというレベルから、幼児前期の平行遊びのように、一緒にいるのを楽しみつつそれぞれに異なることをしている段階もあり、交流の質を高める方向としては、何らかの「協働」をとおしてこそ可能になるのではないかという示唆を得ることができた。

参加各世代の数値で示せるようなアセスメントには至らなかったが、「世代間交流広場」の当日においても、準備の過程においても、アンケートにおいてもまた、高齢クラブの方々と事後の話し合いにおいても、「各世代が互いに学び合い相乗効果を生む」には、そこに「協働」が不可欠であることが見いだせたと言える。

今後、その「協働」の質を高めていくことが求められるのではないかと、とりわけ、「子育て」という活動における「協働」の質的探究が課題になるものと考えられる。

児童福祉施設における 家庭支援専門相談員の役割と働き方 モデル作成のための研究

保育科 中山 正 雄

近年、乳児院、児童養護施設の役割には大きな期待が寄せられるようになり、施設が長い歴史の中で培ってきた力を発揮すべく、家庭調整の役割の充実が求められている。そのような期待の中で、

平成14年度から乳児院に、平成16年度からは児童養護施設に「家庭支援専門相談員（FSW）」が配置されることになった。あたらしい職種として確立し、成果をあげるために現場では様々な努力